



ほっとはうすを訪ねて

作成者：薬学科 1年 竹本、中嶋

概要

09年6月23日(火)に早期体験学習の一環として、水俣市立水俣病資料館とほっとはうすを訪れました。特に、ほっとはうすでは、はじめて胎児性水俣病の患者さんと交流し、水俣病が過ぎ去ったものではなく、現在でも進行している問題であることを認識することができました。

ほっとはうす・みんなの家について

水俣病の胎児性患者らが通所する共同作業所で、障がいを持つ人が働き、出会い、交流すること、水俣病を語り伝えること等を目的に活動している団体です。

ほっとはうすでの活動内容

長本さん始め、5人の胎児性水俣病患者から幼かった頃からの体験などの話を聞いた後、記念の押し花をつかったしおりを一緒に作りました。



活動中の写真



このように、写真を交えて話を聞かせてくれました



クレーンが心の支えだったと話してくれた永本さん



こんにちは素敵なありがとうございました



しおりの作り方を教えてもらってます



最後の仕上げ丁寧にラミネートしてもらいました



水俣病資料館の見学もできました

～感想～

「ほっとはうす」を訪問し、お話を聞いて、水俣病患者の皆さんはとても強い人たちだと感じました。体に障害を持ちながらも働こう、水俣病の教訓を広めようとするパワーは、大きな不自由もなく生活してきた自分たちとは比べようがないほどのパワーだろーうと思いました。そして、みなさんはとても明るくて、堂々としていて、輝いて見えました。 R・Kさん

胎児性水俣病の患者さんは健康な人に比べて発育が遅い上に、進行性の病気だというのは初めて知った。体には言語障害の重い方もいて、初めてその方の話を聞いたとき、言葉が聞き取れなかった。でも聞いているうちに、すべてではないが、部分的に聞き取ることができた。その方はとても一生懸命話されており、ひとことひとことにすごく重みがあった。会話はこのように、重い言語障害を持った方でも、必死に聞き取りうとすることで成り立つのだと感った。 Y・Tさん

これまで数多くの方が水俣病で苦しんできたと思いますが、失われた命や健康を取り戻すことはできません。しかし、過去の過ちを認め、二度と繰り返さないよう対策をうつことは今からでも十分間に合います。それが、私たちがしなければならないことだと思います。犠牲にあった人のためにも、後世の人のためにも、将来創薬研究者として今回の早期体験学習で学んだことを生かしていきたいです。 K・Hさん

私が、一番心に染み付いたのは、「もう一度歩きたい。」という患者さんの言葉だ。水俣病に関する有効な治療がないため、以前歩いていた人が現在歩くことが困難になり、車椅子にたよることを余儀なくされた患者さんの言葉である。ものすごくささやかな願いだが、とても胸が痛くなる言葉だった。 M・Sさん

水俣病認定や補償を求めている人はまだいて、今でもまだ、完全に解決したわけではないということもわかりました。そういうことも含めて、もっと多くの人に水俣病のこと知ってもらいたいと思いました。また、二度とこのような事件が起こってほしくないと思いました。 Y・Nさん

「ほっとはうす」は木の匂いが心地よくとても落ち着いた雰囲気のある場所でした。周囲の人からいじめにあたり、学校に行けなかったり、車いすでの生活を強いられたり、幼い時から苦しい体験をされていました。中でも自分らしく生きるために、それぞれが自ら行動をおこなっていることを聞き、心がお強いと感じました。また皆さん笑顔で生き生きとした表情をしながら、話されていたのがとても心に残りました。 Y・Oさん

「ほっとはうす」の代表者である加藤たけ子さんが口にした言葉の中に特に印象深いものがあった。それは「宝物としての水俣病を伝えていきたい」という言葉であった。水俣病が水俣病被害者の人々や水俣に住む人々に与えた苦しみや苦悩は大変に大きなものであるが、ただ後ろを振り返るだけでなく、熊本の水俣という地で起こった水俣病という甚大な被害をもたらした公害から学んだこと、得たもの、失ったものを後世にしっかりと残していこうという加藤さんの強い意志を表した言葉であったのではないと思う。 M・Hさん

患者さんの中には、とても大きなエネルギーを使わないと声を出すことができない患者さんがいらっしゃいました。私はその人に言葉では表せない程の勇気と希望をもたらした気がします。私たちに何かを伝えようとして懸命に話して下さった姿がとても心に残ってます。普段私たちは友達や周りの人と話すときに何も考えずに話していますが、それが患者さんにとってはとても大変なことなのだと知りました。そして、何気ない日々の生活が実はとても大切にしなないといけないことだとも思いました。 Y・Yさん